

## 看護学概論の展開——第1報 「M. ブーバーの人間学」の視点から

加藤久美子

### 要 約

看護学概論は看護の本質を追究する教科である。

近年、看護の質が論じられ、その中でも患者—看護婦関係の質や患者理解の質が重視されている。

本研究は、マルチン・ブーバーの人間学の立場を理解し、人間を尊重した看護を実践したフローレンス・ナイチンゲールの生涯と看護婦観を彼の人間学の立場から分析した。

更に、関係の仕方と看護の関係について言及した。

---

キーワード：看護学概論, 人間学, われ—なんじの関係, フローレンス・ナイチンゲール

---

### はじめに

近年、看護に対する社会的要請は科学的な判断と暖かい人間性に支えられた、患者やその家族を尊重した質の高い看護の提供である。

一方、看護教育の課題は、より看護の視点に立った教育の実現や看護に対する社会のニーズに応えるべく教育内容の改革や精選、カリキュラム編成をどのようにするかということである。

基礎看護学は全ての看護学の基礎であり、看護の哲学、倫理、理論、技術等をその基盤に置いている。その中で看護学概論は、看護学そのものを哲学や倫理、理論や歴史等の側面から追求しながら看護の本質や機能、役割などを系統的に探究すると共に、看護とその周辺領域を広く概観する教科である。

本論では筆者の看護観の基本になっている人間尊重の看護をマルチン・ブーバー（以下 M. ブーバーと記す）の人間学の立場から考える。

### 研究 方 法

M. ブーバーの人間学を最も表していると言われる彼の著書「Ich und Du. 我と汝.<sup>1)</sup>」を中心に、

M. ブーバーが述べた関係の仕方について概観する。加えて、F. ナイチンゲールの生き方と看護婦観を M. ブーバーの関係の仕方から考え、その関係の仕方と看護の質の関わりについて考察する。

### 本 論

I. M. ブーバーが述べた、人やものに対しての関係の仕方について

M. ブーバーの哲学は対話的、人格的人間学と言われる。筆者は以前から彼の人間学は看護の本質を追究する上で重要な示唆を含んでいると考えてきた。そこで、最初に彼が自分の人間学の基盤になったと述べた出会いの体験を参考にし、彼の思索を理解する。出会いの体験は彼の著書「出会い・自伝的断片<sup>2)</sup>」に書かれている体験を参照する。

M. ブーバーの両親は彼が3才の時離婚している。4才の時、M. ブーバーは近所の年上の女の子から「あなたのお母さんはもう二度と帰ってこないのよ。」と言われ、子供心にそのことは真実であると実感し、その言葉に傷つく体験をする。その言葉は彼の心に突き刺さり、後に、彼は自分と母

の関係は個人的なものではなく、人類そのものに存在する関係として位置づけた。その関係は「ゆきちがい」という概念で表わされ、人間と人間との間の真の出会いの欠如として規定された。しかし、後日遠方から彼や彼の妻子に会いに来た母親と再開した時、二人の関係に対する見方は自分の方にのみ存在していた在り様であったと理解した。この一連の体験は M. プーバーにとって強烈な体験であり、彼は自分の対話の体験、出会いの体験はこの4才の体験に端を発していると語っている。

その後、彼は父親が再婚する14才迄ユダヤ教の教義研究に没頭する祖父と「夫の仕事が円滑に進むように」と援助を惜しまなかった祖母に育てられた。特に祖母は、感覚的に知覚したことが思索と結びつき、誰にも真実に誠実に語りかける祖母として M. プーバーには体験されていた。そのことから彼は14才の時迄に「ある事柄を本当に語るとはどういうことか」を知っていたと語っている。

M. プーバーは30代後半で第一次世界大戦を経験した。人間の尊厳と人間性を無視した戦争と時代背景は彼に思想的な転回をもたらしたと言われる。又、ユダヤ教徒としての宗教的体験や民族的活動も彼の哲学を創っていると言われる。一方、M. プーバーはこれらの個人的体験は自分の思想の性質と方向に決定的な影響を与えた体験ではあるが、又、人間の普遍的真理を引き出した本質的体験であったとも述べている。

その後 M. プーバーは「人間とは何か。」というテーマで人間独自の在り方を哲学的に追究し、45才で彼の代表的著書「Ich und Du. 我と汝」を出版している。この著書で彼が述べた人間の普遍的真理とは、私達が人やものに対して関係する時、2つの態度をとり、それに基づいて世界は2つになるという発見である。M. プーバーはその態度を根元語「われーそれ」と「われーなんじ」で表わし、その関係を説明した。表1は筆者がその関係を端的に表していると理解した部分を「我と汝」から引用した。

「われーそれ」の関係の仕方とは、人やものを対象化し、構成要素を分析し、法則を引き出し、性質や構造を明らかにする等、いわゆる科学的な

表1 M. プーバーによる世界に対する2つの態度

根元語による分類	関係の仕方と内容
「われーそれ」の関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全人格を傾倒しても語ることはできない。</li> <li>・形、動き、種類や類型で分け、法則を引き出し、原理や性質や構造を明らかにする。</li> <li>・関係の中で見るのではなく、対象化して見る。世界は人間の経験の対象になる。(対象化の世界)</li> </ul>
「われーなんじ」の関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全人格を傾倒して始めて語るができる。</li> <li>・なにものも対象としては存在せず、関係の場に立つのみである。</li> <li>・経験は自己の内で行なわれるのではなく、人と世界の内で行なわれる。</li> <li>・関係は相互的で、共に関係を結び共に影響し合う。(関係の世界)</li> <li>・人格として姿を表わし、主体として自己を意識する。</li> </ul>

関係の仕方であり、人やもののある距離をもって見る関係の仕方である。医学や生物学は人間を対象化して成立する学問であり、人やものとの距離を置いて関係している。

「われーなんじ」の関係の仕方とは、人やものとの関係の中に入り、お互いに関係を結びながら、その中で人やものを見る関係の仕方である。従って、人としての人格を傾け人やものと触れ合う関わりであり、自分と人やものとの距離を感じない、関係の中で自分が実感的に解る関係の仕方とも言える。

又、M. プーバーはこのお互いの人格を傾けて「われーなんじ」の関係で関係する仕方を「出会い」という概念で表わし、この関係の仕方の中で真の対話が成立すると述べている。この真の対話についても M. プーバーは「出会い・自伝的断片」で杖で樹にふれた体験から説明している。杖で樹に触れた時、M. プーバーは杖を握っているここと杖が触れているそこで、二重に樹に触れていることを感じた。そのことから対話とは、自分が相手のことを思い、自分が相手に語りかける(ここ)から杖を通して自分のある部分が相手に伝えられるが、それは純粹な振動のようなもので実体的ではない。それが自分が思う相手(そこ)にとどま

り、こちらのお話を受容する働きに参加する。そして、相手（そこ）からも信号が自分（ここ）に伝えられ、自分は相手の話を受容するのである。つまり、対話とは自分をふり向ける人間を内に含みつつ展開し、自分も相手も共に受容するという積極的で能動的行為と言える。

「われ—それ」と「われ—なんじ」の関係をより教えてくれるのは少年の感性で実感した M. ブーバーと馬の話である。祖父の家には彼のお気に入りの馬がいて、彼はいつも身体を撫でて可愛がり、馬も M. ブーバーを慕って体を寄せてきていた。彼は自分と馬の関係は他者として違う生命体として引き合う、通じあう存在として感じていた。馬も M. ブーバーを信頼し、M. ブーバーは彼の思いを解ったとうなずく馬を感じていた。他者として互いに感じながらも一体感を感じている関係であった。しかし、ある日 M. ブーバーが馬の首を撫でながらそれが自分にとってどんなにおもしろいことかを急に意識したという。「すると突然、私は自分の手を感じた。」と述べ、自分に意識が集中するのを感じるのである。その後は馬を可愛がっても馬との関係は何かが変わり、通じ合う生命体としての他者もいなくなり、馬も以前の心が通じている時のような反応を示さなくなるのである。

馬との関係は「われ—なんじ」の関係から「われ—それ」の関係になったこと、それは M. ブーバーが自分自身の存在を感覚し、そこに意識が集中した時、馬との距離ができたことを物語っている。

M. ブーバーはこの世の「なんじ」はいかなる「なんじ」も一つの「それ」にならなければならないと述べている。馬との体験は「われ—なんじ」の関係は保持したり、永遠に続くものではないことを示している。「われ—なんじ」の関係は記述、分析によって「われ—それ」の関係に対象化され変化する運命にあると M. ブーバーは述べている。

M. ブーバーと対話をしつつ研究を重ねたという植村は「人間が動物や植物と違い『人間として存在する』場合の存在とは他者（汝）との人格的な関わりの実現に関与しうることを意味している。人間の存在は具体的な汝へと語りかける個々の行

為において顕在する。(略)『関わりの中に存在すること』『他者と共に存在すること』が人間として存在することの根拠である。人格的関わり、出会いが人間に真の存在を与える<sup>3)</sup>。」と述べている。

M. ブーバーの哲学が対話的、人格的人間学と言えるのは「われ—なんじ」の関係の中でこそ人間とは何かを探求でき、この関係の中で人格的関わりや対話が成立し、その関係の中で人間としての真の存在を確認することができるという人間論に立脚しているからであると筆者は考えている。

看護は人間関係の中で展開される。看護婦—患者間で『われ—なんじ』の対話的・人格的な関係が成立し、看護婦と患者が人間として真に存在し、確認し合う関係ができれば、筆者は人間尊重の看護が展開されると考えている。

なぜなら、人間は病気によって真に存在することが困難になることがある。人間尊重の看護は、患者がどのような状況であれ、真の人間として存在できる看護を希求している。そのため、看護婦自身が拘りや思いこみを取り、自己信頼を獲得し、患者との関係の中で真に存在できることを人間尊重の看護の原点に据えなければならない。

この2つの関係の仕方は自分自身に対しての関係の仕方であるとも M. ブーバーは述べている。

自分自身に対して「われ—それ」の関係の仕方とは、自分を対象化し、自分はこのような人間であると分類したり、性格を分析する等、自己を客観的に距離をおいて見る関係の仕方である。日常の自己紹介では「われ—それ」の関係の仕方から自分のことが語られる事が多い。

自分自身に対して「われ—なんじ」の関係の仕方とは、自分を外から客観的に見るのではなく、関係の中で自己がありのままに感覚され、他者との関係の中で他者を感じながら自己の存在が自由に動いている関係の仕方である。実感しているありのままの自分が瞬間的に意識化される状態であるとも言える。ありのままの自己に気づく、自分を知る、随所に主となるという自己の在り様は「われ—なんじ」の関係の仕方では体験されているといえる。真に自由な関わりをもつということは「われ—なんじ」の関係の仕方では他者や周囲の世

界に関わっていくことである。

つまり、自己理解にも「われ—それ」と「われ—なんじ」の関係からの理解の仕方があるが、自己を尊重するという self-esteem の概念等は自己理解を「われ—なんじ」の関係の中でも体験されなければ本来的な意味はなさないと考える。

## II. F. ナイチンゲールの自立の過程と

### 「われ—なんじ」の関係

看護学概論の授業で看護の本質を探究する時、筆者は「われ—なんじ」の関係の中で看護をし、この関係の仕方でも看護や看護婦について述べた F. ナイチンゲールを最初に取り上げる。F. ナイチンゲールは自分の思いや考えを非常に多く書き残しており、それらは彼女の生涯を知る上で貴重な資料となっている。筆者にとってその資料は「われ—それ」と「われ—なんじ」の関係の仕方が人間的な自立や看護の質に関わることを教えてくれる貴重な資料である。その資料をもとに書かれた伝記を参考にして F. ナイチンゲールの自立の過程を「われ—それ」と「われ—なんじ」の関係の視点から見、その関係が彼女の看護や看護婦観にどのように反映されているかについて考えてみたい。

F. ナイチンゲールは上流階級の実家に生まれ、当時の高い教育を受け、なに不自由のない生活をしてきたが、精神的には満たされることなく、いつも何かを求めていた。それは彼女が「神のために働くように」という神からのコーリングを受けたことによってであり、自分の使命はどこにあるかという自分への問いに答えが出せないところからきていた。

ナイチンゲール家は親戚縁者や使用人の多い大家族で、F. ナイチンゲールは祖父母や周囲の人々を看護する機会に恵まれた。彼女の看護を受けた人は彼女の看護に感謝し、それぞれに彼女の看護の才能を評価した。

F. ナイチンゲールも看護すること自体に喜びを感じ、次第に看護婦として病人の看護をしたいと考えるようになった。その希望を何回も家族に打ち明けるが、家族は F. ナイチンゲールの思いを悉く退け、反対するための様々な手段を取った。

自分の希望を聞き入れられず F. ナイチンゲールは神との対話によって自分の悩みを解決しようと長い年月を費やしている。時には修道院を訪れたり周囲の人々に宗教的な問いを投げかけ、神の御心を深く理解しようとした。自分の人生を生きたくても生きられていないと感じながら、自分の結婚を含め、その年月は自分の在り方を問う日々であった。

10年以上の歳月を経て彼女と家族との間で起きていた悩みから解放されたのは、彼女が31才の誕生日直後である。1851年6月の日記に「もはや家族の共感や援助を期待してはならない。私は自分を理解してもらおうと長い間闘ってきたし、理解されないことで傷つき落胆し焦燥にかられ過ぎてきた。自分を生かすためには何かを自分でつかみとらねばならない。それは与えられるものではない。」と書いている。彼女は、家族の理解を期待する自分から自立し、家族と自分との距離を取ることができるようになったと言えよう。

自分の自立には自分で責任をとる何かを持たなければならないと決意し、彼女は本格的に看護の教育を受ける決心をした。2週間後 F. ナイチンゲールは自らの目的を持ってドイツの宗教施設カイゼルスヴェルト学園に向けイギリスを旅立っている。

F. ナイチンゲールはカイゼルスヴェルト学園でテオドル・フリードナー牧師の許、遂に自分が看護婦になることの意味を見出すのである。それは彼女が母親にあてた次の手紙から理解することができる。「私はここでの生活の全てに深い興味を感じており、心身ともに健康です。これこそ真の人生というものです。今こそ私は、生きるということはどういうことであり、人生を愛するということはどういうことかが、実感としてよく解りました。今ではこの人生をあとするのは悲しいことだと考えています。神様は人生を興味豊かな、祝福にあふれたものにして下さいました<sup>5)</sup>。」

筆者はここに神の御心と自分の人生を看護に統合し、ありのままの自己に出会った F. ナイチンゲールの人間としての自立を見る。言い換えれば筆者は F. ナイチンゲールは神と自分自身と看護

について、この時「われ一なんじ」の関係を確立したと理解している。それ迄のF. ナイチンゲールは自分の希望が通らないことで両親やたった一人の姉に対して敵対し、自分の話によって家族が動揺すると彼女も動揺し、自閉的になったり、死ぬこと迄考えている。神との対話も「神は私に何を求めているのか。」という一方的な問いを自己の中で繰り返している状態である。

当時の社会的な状況やナイチンゲール家の家庭環境を考えると両親の反応も止む終えないと思うが、自分の生き方を神のコーリングのもとで理解しようと必死だったF. ナイチンゲールにとって家族を巻き込んでも混乱せざるをえなかったのではないかと理解する。F. ナイチンゲールがカイゼルスヴェルトへ旅立つまでの悩みは家族に対しても自分自身に対しても『われ一それ』の関係の仕方であったとも言える。

では、F. ナイチンゲールの体験は、なぜ『われ一なんじ』の関係の仕方に変化したと言えるのであろうか。表1を参考にして考えてみる。

1851年6月の日記の「自分を生かすには何かを自分でつかみとらなければならない。それは与えられることではない。」という言葉は、正に主体としての自己を意識し、自己の責任を自覚した所で語られた言葉である。

カイゼルスヴェルト学園での内面的体験を語った「生きるとはどういうことであり、愛するということとはどういうことであるか実感として解った。」ということは、看護と生き方と宗教的な愛を関係の世界の中で解ったことを表わし、それら(看護と生き方と宗教的な愛)の関係は相互的で、共に関係を結び、共に影響し合うことを実感した所から語られた言葉であるからである。カイゼルスヴェルトでの経験も単に自己の内で行なわれたのではなく、F. ナイチンゲールが看護を生き生きと学んだ世界の内で行なわれたと言える。それは「ここでの生活の全てに興味を持ち、神が人生を豊かなものとしてくれた。」と語っている様に、看護を学ぶ、看護を実践する生活と自分の人生という世界がF. ナイチンゲールの内面で体験されたからである。

その後のF. ナイチンゲールは、家族から離れロンドンの病院の監督(看護の管理者)となる。

しばらくしてF. ナイチンゲールはクリミア戦争で傷ついた兵士達に看護がなされていないことを報せる特派員の書いた新聞記事を読むのである。彼女はその記事に自分の使命を直感しクリミアに行くことを志願する。時の戦時大臣であり、彼女の理解者であったシドニー・ハーバートも、F. ナイチンゲール以外の適任者はいないと、彼女の派遣を決めていた。F. ナイチンゲールは政府からクリミアへ行く看護婦の責任者として任命され、2週間の内に看護団を組織し、看護に必要な物品を調達してクリミアに出発している。F. ナイチンゲールの看護が評価された背景には傷病兵を人間として尊重し、昼夜、心をこめて看護したことは知られているが、その事に加えて彼女の看護は傷病兵の死亡率を42%から2.2%に激減させたことにある。この結果は野戦病院での看護管理を確立し、患者に清潔な環境と栄養のある食事を準備し、心理・精神的面では常に患者に慰めと癒しを与え、心理的自立と野戦病院を退院した後の傷病兵の職業訓練施設を作り、社会的自立まで看護として実践したところからきていると筆者は考えている。特に異国の野戦病院で死んで行く兵士への看護はF. ナイチンゲールが最も心をくいだいた看護であり、彼女の高い精神性の影響で兵士は霊的にも救われる体験をしている。亡くなった兵士の家族にあてたF. ナイチンゲールの手紙は、家族に対する看護そのものを感じさせる手紙である。

クリミア戦争が終結した時、彼女の胸の内は「私は地獄を見た。」という思いであり、一切の帰国歓迎行事を辞退したという。F. ナイチンゲールは、祖国に思いを残し惨めな姿で死んでいった兵士と「われ一なんじ」の関係を体験していたからこそ華々しい行事に参加する気持ちになれなかったのだろう。

帰国後は、陸軍病院の看護改革、セントトーマス病院に看護婦学校を設立、人間の健康と看護の関わりや看護の本質と看護教育・管理の重要性を説明するための著作活動、患者の病気回復のための病院建設に対するアドバイス、産業革命後の都

市環境と市民の健康に対する衛生知識の普及、植民地の衛生状態の改善に対する意見書の提出など、彼女は看護の立場からイギリスの国策に関わる自立的な仕事を展開するのである。F. ナイチンゲールの仕事はむしろクリミア戦争後であったと言っても過言ではない。特に、産業革命後の都市環境の悪化と劣悪な労働環境の中で働き健康を害する労働者、幼くして死んでゆく都会の子供たち、貧しい暮らしを強いられている植民地の人々に対して「われ—なんじ」の関係を築いていったことでF. ナイチンゲールのクリミア戦争以後の仕事の展開があったと筆者は考えている。

F. ナイチンゲールは看護観、看護婦観を自己の存在の仕方と関連させ次のように述べている。「本当の看護という仕事は静かな、そして個人的な仕事です。(略)『私』という人が、私の魂の奥底の『どこ』に存在しているか、『私』と呼んでいる内なる人である『私』が『どのように』存在しているか、それが問題なのです<sup>6)</sup>。「看護婦は患者の人に対して精神的な影響力も持っていなければなりません。それが可能になるのは、『あるがまま』の自分であることによってです<sup>7)</sup>。」と述べている。この看護観、看護婦観はF. ナイチンゲールが看護婦になるまでの葛藤の中で自らに問っていたことであり、カイゼルスヴェルト学園で『あるがまま』の自己を体験し、クリミアでその『あるがまま』の自己に従って看護し、患者に精神的影響を及ぼした体験から述べられたと筆者は考えている。あるがままの自分とは、F. ナイチンゲールが自分の魂、自分の内なる人である自分の存在を深く観た体験を通じた所にあり、M. プーバーの言う自分自身に対しての「われ—なんじ」の体験と連動していると筆者は考えている。

### Ⅲ. M. プーバーの関係の仕方と看護の質

現在、看護に求められている看護の質の向上は多くの側面から考えなければならないが、筆者は1つには、看護婦と患者の関係の質や患者理解の質が問われ、人間を尊重する関係が求められていると考えている。突き詰めれば、看護婦と患者の関係の質はM. プーバーが明確にした関係の仕方、対話的、人格的關係を築くことではないだろうか。

「われ—それ」の関係の仕方は患者を客観的に観察し、患者の疾患やそれによって起る患者の苦痛や苦悩に対して原因追求的に看護し、看護過程に基づいて看護診断をし、看護する方向である。この方向は知識と技術を患者に有効に使う、近年言われるクリティカルシンキングを鍛えて看護することに代表される。

「われ—なんじ」の関係の仕方は主に看護婦の人格を傾け看護する方向であり、患者との関係の中で患者の苦痛や苦悩を共感的に解ろうとし、解る、解り合うという体験を通して知識や技術を使って看護する方向である。

この方向はトランスパーソナルな看護としてワトソン等が提唱している看護に代表される。

本来の看護は「われ—それ」の関係の仕方と「われ—なんじ」の関係の仕方が縦糸と横糸になって実現されている。今、看護に求められている看護の質の向上のために「われ—なんじ」の関係の中で患者を共感的に理解しようとし、その関係を重視して看護をする横糸を強化しなければならないと筆者は考えている。

次に、「われ—なんじ」の関係の仕方が看護の質にどのように影響するかについて述べる。

第一に看護の対象は人間であり、様々な体験をしている。病気は何であれ、看護は患者が今体験していることを解ろうとしなければならないし、患者はその病気によってどのような思いや感じを持っているかを理解していかなければならない。その解り方は患者を対象化して看護婦側の尺度で解る「われ—それ」の解り方ではない。その人の人生や生き方、思想や考え、気持ちや感覚していること、その人にとっての意義や意味、本人が意識していないかもしれない表面の言葉や行動と異なる意識下にある思い等、その人のありのままを解ろうとすることは「われ—なんじ」の関係の仕方で解ることである。看護はその人が身体的にも精神的にも霊的にも体験している所を解り、支えることで、より患者のニーズに添ったものになり、的を得たその人の個別性を尊重した看護になる。

第二に看護は人間関係の中で展開され、その関係性の違いにその看護の独自性がある。M. プー

バーが杖で樹に触れた時感じたこととあそこは看護婦と患者が感じたり思ったり考えたりしていることであり、お互いの心や体験がそれぞれに振動として伝わる杖が関係を示している。

患者と看護婦はお互いに違う人間である。「われ—なんじ」の関係ではお互いの心や体験が振動として伝わり、看護は患者と看護婦両者の振動の相互理解に基づく関係の中で展開されるのではないだろうか。患者と看護婦がお互い目標を一致させて行なう看護、お互いから学び合い影響し合う看護、機械ではない人間が人間を看護する意味が「われ—なんじ」の関係の中で実現されると筆者は考えている。その様な看護は患者と看護婦双方が関わって成立し築かれていく質の高い、個性・独自性のある看護である。

第三に看護はF. ナイチンゲールの所で述べたが、究極的には患者その人の生き方に関わっていく。人間愛や人間尊重を通して患者その人の人間的成長を支え、その人に精神的な影響力を及ぼすこともある働きである。そのような究極の看護を実現するにはF. ナイチンゲールのように看護婦自身が自分の人生を見つめ、その中で自分の人間的な体験や自立の体験を大切にしていなければならない。つまり、「われ—なんじ」の関係の仕方でも自分を見る体験を重視する必要がある。見藤は看護教育に於いて専門的知識や技術を教授すると共に、専門家としての態度や自律性を育てる人間的な成長を援助する教育の必要を以下の様に述べている。『人間は「われ—なんじ」の関係の中で人間となり、真実の自己になってゆく。人を育てる方法は「われ—なんじ」の中にあり、「われ—なんじ」の関係は看護教育の中心概念になるだろう<sup>8)</sup>。』

看護が人の生き方に関わり精神的な影響を与えるとすると「われ—なんじ」の関係は看護の中心概念でもあり、そのために看護婦の人間的成熟は不可欠であると筆者も考えている。F. ナイチンゲールが「患者に精神的な影響を与える看護はありのままの自分によってである。」と述べたありのままの自分とは、F. ナイチンゲールが辿ったような内面的で、人間的な成長に支えられた「われ—なんじ」の関係が成立した自分と言えよう。F. ナイ

チンゲールから学ぶことは人間としての自立と人間としての自由とは何かを体験的に理解し、看護の対象である人間と「われ—なんじ」の関係の仕方に関わる看護の意義である。筆者は看護の場で「われ—なんじ」の関係が、自己と他者に体験できれば、人間尊重の看護が実現されると確信している。

## おわりに

M. ブーバーの人間学の中心概念である関係の仕方について彼の著書「Ich und Du.」を概観し、理解を深めた。

又、F. ナイチンゲールの生き方を「われ—それ」「われ—なんじ」の関係の仕方から見て、彼女の看護と看護婦観を理解した。F. ナイチンゲールは「われ—なんじ」の関係を体験して人間的に自立し、「われ—なんじ」の関係の仕方でも看護婦の仕事をしたと理解した。

看護は人間を対象化し「われ—それ」の科学的、分析—統合的に見て、人間との関わりの中では、「われ—なんじ」の関係が展開されれば、人間尊重の看護が実現できるというのが、筆者の看護論の中心概念である。

## 文 献

- 1) Buber M: Ich und Du. Verlag Ianbert Schneider. Heidelberg. 1957. (野口訳) 孤独と愛。我と汝。東京。1958.
- 2) Buber M: 出合い 自伝的断片。理想社。東京。1966.
- 3) 植村秀一: ブーバーの人間学。教文社。東京。95-96, 1987.
- 4) Woodham S: フロレンス・ナイチンゲールの生涯 現代社。東京。125, 1981.
- 5) Edward C: ナイチンゲール「その生涯と思想」時空出版。東京。158, 1993.
- 6) Nightingale F: ナイチンゲール著作集。看護婦と見習生への書簡12。現代社。東京。423, 1977.
- 7) Nightingale F: ナイチンゲール著作集。看護婦と見習生への書簡12。現代社。東京。423, 1977.
- 8) 見藤隆子: 人を育てる看護教育。医学書院。東京。81, 1987.

The development of introduction to nursing —— The first report.  
From the viewpoint of Humanologies by Murtin Buber.

Kumiko KATO

**Abstract**

Introduction to nursing is a subject which inquire into the intrinsic nature of nursing. Recently, the quality of nursing has been discussed and the quality of patient-nurse relationship and patient understanding are brought to our notice.

This paper aims to talk with the understanding of the Humanologies by Murtin Buber and to analyze the life and view of nurse of Florence Nightingale who had realised a human-respected nursing from viewpoint of the course of relationship that M. Buber discussed.

Furthermore I discussed in relation to the quality of nursing and the couse of relationship by M. Buber'viewpoint.

---

**Key words :** Introduction to Nursing, Humanology, I-thou relationship, Florence Nightingale

---

School of Health Sciences, Okayama University